

平成 25 年度  
自己点検・評価報告書

佐賀大学国際交流推進センター

## I 新センターの設置の理念と概要

### 1. 新センター設置の経緯と目的

佐賀大学の国際化と国際交流を進めることが佐賀大学の理念と目標に位置づけられ、そのための全学的な推進組織として、「佐賀大学国際交流推進センター」が平成 23 年 10 月に設置された。

佐賀大学では、本学が目指す国際交流の理念と方向性を示し、そのための実施戦略を策定することが有効な道筋であると考え、本学の国際交流に造詣の深い 30 人を超える教職員の英知を結集する策定委員会（国際戦略構想検討委員会）を設置し、約半年をかけて「佐賀大学国際交流戦略構想」を平成 23 年 1 月に策定した。そして、その国際交流戦略構想において、国際交流の中核組織の設置が提案された。

国際交流センター（仮称）設置準備委員会は、6 つの基本構想と 7 つの国際戦略からなる『佐賀大学国際戦略構想』を円滑に実施していくために、国際交流センター（仮称）の目的及び機能、管理運営、組織、施設等について検討した。センターは、大学の方針の下、全学の国際交流事業を統括し、本学の国際化推進の牽引役及び対外的な窓口となる重要な組織として設置することとした。センターの主な機能としては、全学的な国際化及び国際化を主導する人材育成を推進するための国際交流事業の企画・立案、外国人留学生及び外国人研究者の受入れ促進並びに本学学生及び研究者の海外派遣促進のための支援、地域と一体となった国際化を推進するための地域国際連携の 3 つが挙げられる。

検討の結果、国際交流センター（仮称）の名称を「国際交流推進センター（Center for Promotion of International Exchange）」（以下「センター」という。）とすることに決定し、本学の国際交流に関する企画・立案・実施支援、及び市民・行政・産業界等からの要請に迅速に対応するため、「国際交流企画推進室」、「地域国際連携室」、「学生交流部門」、「学術研究交流部門」及び「鍋島サテライト」を置くことにした。

### 2. 新センターの組織概要

国際交流推進センターは、次のような組織体制であり、平成 25 年 4 月時点の担当者を示す。

- ・センター長：理事（研究・国際貢献担当）・副学長 中島晃
- ・副センター長：本学の専任教授 外尾一則
- ・鍋島サテライト長：本学の専任教授 青木洋介
- ・国際コーディネーター：2 名の専任教員 藤田清士、山田直子  
1 名の事務系職員 山田佳奈美
- ・国際交流企画推進室：室長・藤田清士、6 名の併任教員
- ・地域国際連携室：室長・新井康平、2 名の併任教員
- ・学生交流部門：部門長・山田直子、9 名の併任教員
- ・学術研究交流部門：部門長・杉山晃、3 名の併任教員
- ・国際マネージャー：国際課課長 永田恒久
- ・事務職員：国際課所属職員
- ・国際アソシエイト：留学生臨時雇用

### 3. 佐賀大学国際戦略構想

#### (1) 国際戦略構想の概要

「国際戦略構想」では、佐賀大学の国際化の特徴である教員の「草の根」による国際交流の蓄積を重視した上で、組織的かつ機能的な観点を加えた国際化が必要であるとした。この戦略においては、日本人学生（在日外国人を含む。以下同じ。）の国際性の涵養を重点課題とし、学生に的確な国際的視点を備えさせる「手段」としての「新国際教育プログラム」等の策定を提案し、国際的な就業力を備えた人材育成とその輩出を行うことを提言した。人格形成の重要な時期に、本学に在籍する学生に対し国外の実情やこれに対処する適切な行動基準を教示することが本学においての国際化の目的の一つである。また、本学の国際化が地域の国際化を喚起する仕組みとして、本学が行うべきアクション等を構想した。

「国際戦略構想」では、総合的な国際交流推進体制を国際交流推進センターが核となり、本学の国際化を組織的に推進することを目指すこととした。

さらに、佐賀大学憲章における『アジアの知的拠点を目指し、国際社会に貢献する』を基本的な理念とし、「目標」ではなく「手段」としての国際化により、アジアの知的拠点を目指すため、次の3点に留意して国際戦略を展開することを掲げている。①国際化を大学間の競争力強化の手段の一つとする、②国際化を通して様々なアクションを起こすことが地域の活性化や国際化の要因となり、これが大学の国際化を引き起こすように連携したアクションを企図する、③佐賀県の「国際戦略総合特区構想」との密接な連携により、地域の実証型グローバル化対応社会の構築に寄与する。

「国際戦略構想」は、本学の国際化を飛躍的に高めることを目指して、以下の七つの戦略を提案した。

#### **戦略1：英語特別コースなどを拡充した新国際教育プログラム、新特別コースの再構築**

留学生の質を重視する観点から、大学院留学生の国際教育に重点を置くこととし、「日本に強い留学生」の輩出を目指し、既存の国際教育プログラムの改善、改編を行なって、「新国際教育プログラム」を構築する。

#### **戦略2：海外を志向する日本人学生向けの国際教育プログラム**

留学を希望する日本人学生のため、あるいは日本人学生を留学へと啓発するため、留学の動機づけとなる部局横断型の国際教育プログラムを創設し、「海外に強い日本人学生」の輩出を目指した方策を実施する。

#### **戦略3：国際化の先導となる学術分野及びプログラムの選択と集中**

複数の分野に国際化を先導する可能性のあるプログラムが出現している。本学の国際化を先導する分野とプログラムを選択し、組織的に集中支援することにより、効率的に本学の国際化の深化を図る。

#### **戦略4：留学生・外国人教員等に係わる国際化支援制度の創設**

国際化に貢献する学生及び教員を引き出すために、経済的支援と事務支援に関する制度を整備する。

## 戦略5：企業や地域と連携する国際化の実践プロジェクト

留学交流体験学生（留学生及び日本人学生）を対象に、企業インターンシップの体験学習、日本企業や海外企業への就職支援を、地域及び産業界との連携・協力を得て、実現できる体制の構築を図る。

## 戦略6：受入れ及び派遣重点大学の指定とこれまでに輩出した海外研究者・教育者との連携による留学生・研究者の受入れ

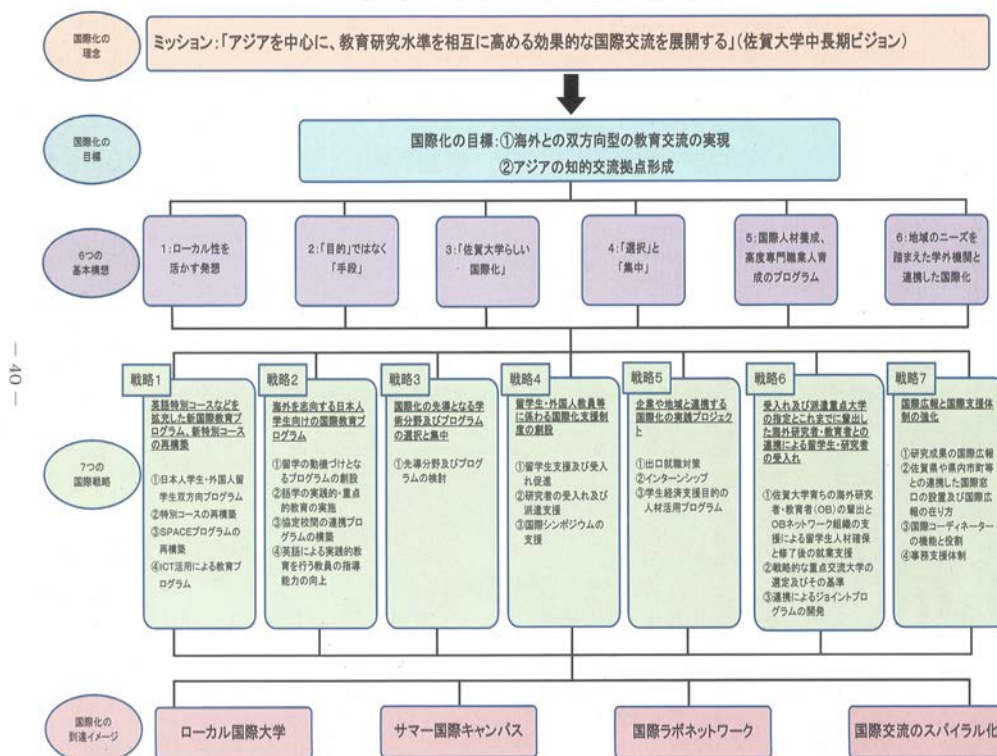
帰国後に、研究者・教育者、企業人等として活躍している優秀な留学生OBのネットワーク組織を構築し、留学生のリクルートと就業活動に対する協力支援体制を築くとともに、重点交流大学との間の教育・研究交流を強化し、独自のジョイントプログラムの開発を行なう。

## 戦略7：国際広報と国際支援体制の強化

研究活動と国際教育プログラムを海外にアピールするため国際広報を開始するとともに、地域（行政、企業）と連携して地域・産学連携国際交流を展開する窓口と広報の設置を検討する。

そして以上の戦略の推進によって実現する本学の国際化の具体的な到達イメージとして、4つのモデル<ローカル国際大学>、<サマー国際キャンパス>、<国際ラボネットワーク>、<国際交流のスパイラル化>を掲げた。

佐賀大学国際戦略構想の概要図



## (2) 4 部門・室の機能

上記の国際戦略を機動的に実施するために2つの室と2つの部門が設けられた。各室と部門の具体的な担当機能は以下のとおりである。

○国際交流企画推進室：本学の国際化に係る重要事項を部局と連携して企画立案し、支援する。

国際戦略プロジェクトの企画推進、海外拠点の整備・活用の施策・実施、危機管理体制の整備、国際広報、卒業生（留学生）ネットワークの構築、JICA・日本学生支援機構等の各種機関との連携、国際交流会館等の宿舍の管理・整備など

○地域国際連携室：市民・行政・産業界からの要請に迅速に対応し、地域と連携した交流事業を推進する。

留学生の企業等でのインターンシップ受入れ、留学生の就職活動支援、地域社会と国際交流推進の連携・協力、地域社会と連携した留学生の援助支援、佐賀県・市町村・各種団体等と連携した国際交流事業の実施など

○学生交流部門：学生の双方向交流促進を支援する。

留学生交流・交換事業の実施、日本人学生の海外派遣先の開拓と派遣支援、留学生の受入促進、国際教育プログラムの支援、重点交流大学とのジョイントプログラム開発の支援、外国大学との学生交流の協定締結、留学生の生活指導・相談、留学生の奨学・生活支援など

○学術研究交流部門：研究者の双方向交流促進を支援する。

教員の海外研修支援、外国大学との学術交流の協定締結、外国大学等の研究機関との共同研究の促進、国際シンポジウム・国際セミナー等の実施支援、外国人研究者の受入支援、研究成果等の国際社会への情報発信など

## 4. 平成25年度自己点検・評価の体制

国際交流推進センターでは、ほぼ毎月行う部門・室の「定例会議」において、スケジュールの相互確認とともに点検を行っている。

さらにセンターの企画・実施する重要な事項の全ては、毎月1回開催する運営委員会に諮り、部局代表者の意見の収集と承認を得ている。

センターが発足して今回が2回目の自己点検・評価であるが、自己点検・評価体制は、総括についてセンター長（中島晃）、部門・室の横断的活動及び国際戦略対応について副センター長（外尾一則）、部門・室の活動について国際コーディネーター専任教員（藤田清士、山田直子）が分担して行なった。

## II 平成25年度自己点検・評価

### 1. 留学生受け入れ教育の支援に関する状況と自己評価

#### (1) 活動状況と成果

##### 項目1：SPACEプログラム改革の概要

昨年度の改革の要点は、

- ① プログラムのフレキシビリティ
- ② 理工学部、農学部における「自主研究」の必須科目化
- ③ SPACE-Jのブリッジ・コースの設置

であった。本年度の4月より新プログラムによる受け入れを開始した。

特に②については、平成25年4月よりSPACE-Eに参加する理工学部と農学部の交換留学生については、「自主研究」を必須科目とした。

また選択科目も「都市システム学トピックス」、「言語と文化の諸相」、「我が国の環境保全の最新情報」の3科目が追加された。

##### 項目2：SPACE-Eプログラムの改革

SPACE-Eは協定校の正規学生を対象とした交換留学プログラムで、英語により教育・指導・支援をするものである。留学生が交換留学プログラムに参加しやすくするため、平成25年度より定員を30名に増やした。また、これまで受入開始時期を10月のみに限定していたが、4月からの参加も可能とし、さらには1学期間だけの留学も可能となった。受入学生数は前期23人、後期30人であった。

##### 項目3：SPACE-Jプログラムの新設

SPACE-Jは平成25年10月に新規開設されたプログラムである。日本語で専門科目を履修する交換留学生の受入は以前より行なっていたが、プログラム化されておらず、交換留学生が学習や課外活動を通して日本社会や文化の理解ができているのかを把握することができなかった。プログラム化により、プログラムを担当する教員と各学部の受入教員とが、交換留学生の学業や生活面でのアドバイスを行なうことが可能となった。

##### 項目4：交換留学生を誘引するための奨学金の確保

昨年度創設した交換留学生を対象とした奨学金（ひと月5万円の学習奨励費）の支給を開始した。佐賀大学奨学金は、SPACE-Eの特徴である多文化の地域・国出身の学生が学ぶことを達成することを保証するために2013年4月から用意することにしたものである。加えて、SPACEプログラムに対するJASSO奨学金に申請し、計画通りの人数を確保することが出来た。後期受け入れの学生の中で、JASSOの奨学金受給者が26人、佐賀大学の奨学金受給者が2人となった。

また、SPACE-Jの学生についても、佐賀大学奨学金を支給することとした。本年度の奨学金受給者は16名（JASSO12名、佐賀大学奨学金4名）と、参加者総数25名のうち、64%が受給することができた。

## 項目 5：短期プログラム（サマープログラム）の開始

平成 23 年 1 月に策定された佐賀大学の国際戦略構想に掲げられた一つの目標が「サマー国際キャンパス」である。海外重点大学国内の関係大学等と連携して、研究者や学生を受け入れるという計画に基づき、平成 25 度は本学としては初めての試みであるサマープログラムを実施した。海外重点大学の学生を対象とするプログラムは

“Creating Innovation for Sustainability in Young Leaders” というテーマを掲げ、プログラムを通して持続可能な社会の実現のために若者がどのような貢献をすべきかを様々な側面から検討した。初年度である平成 25 年度は 8 カ国・地域の協定校より 22 名の留学生と 12 名の佐賀大学の学生が参加した。地球規模での連帯と協力が不可欠な持続可能な社会の構築をテーマに、1 週目に「農業・食・地域」、2 週目に「環境とエネルギー」、最終週には「伝統文化・技術の継承」に焦点をあて、学内の専門家による講義のほか、市民団体との森林保全や農作業等の協働活動、自治体との連携による視察などを通じて実践的に学習した。またプログラム期間中は、佐賀大学の学生との 2 泊 3 日の北山少年自然の家での合宿や一般家庭でのホームステイ、市民グループとの協働活動など、人的交流を通して、佐賀や日本についての理解を深めた。

### (2) 分析評価

項目 1～項目 3 は戦略 1 「英語特別コース等を拡充した新国際教育プログラム、新特別コースの再構築」、項目 4 は戦略 4 「留学生・外国人教員等に係わる国際化支援制度の創設」、項目 5 は戦略 5 「企業や地域と連携する国際化の実践プロジェクト」に対応して実施された。また項目 5 は国際化モデル 2 「サマー国際キャンパス」の実現に関わる内容であった。

項目 1～項目 3 は戦略 1 の目的を果たしている。これは従来のプログラムを抜本的に革新するプログラムであり、高く評価される。さらに各部局の協力体制を整えてプログラムを有効に実施することが出来たことにより、今後佐賀大学が行う国際教育プログラムの核のひとつに位置づけられると評価できる。

また、項目 5 は、国際化モデルにとって戦略的に重要であり、初年度ではあるが、その成果が得られたことは高く評価できる。

## 2. 海外留学・派遣の支援に関する状況と分析評価

### (1) 活動状況と成果

#### 項目 1：派遣促進のための効果的な情報発信と支援の強化

昨年度に引き続き、『佐賀大学生のための海外留学ガイド』を発行し、平成 25 年度に入学する新入生および学部 2 年生全員に配布した。

#### 項目 2：派遣促進のための支援制度

昨年度に引き続き 3 つの支援事業を継続した。(1) 国際交流推進センターが実施する短期海外研修に参加する学生に対する上限 10 万円の奨学金「佐賀大学学生海外語学研修参加助成」、(2) 各学部・研究科が専門分野に特化した海外研修支援として、採

択されたプログラムに参加するに対し5万円の奨学金を支給する「佐賀大学学生海外研修支援事業」、(3) 学生個人が留学計画を立てて渡航する学生に対する奨学金として選抜された学生に対して一人あたり5万円を支給する「佐賀大学学生海外派遣奨励費」である。

### 項目3：交換留学生の派遣：「アジアで活躍するリーダー養成プログラム」等

平成25年度は、交換留学の派遣先大学の拡大をめざし、特に留学希望の多いヨーロッパ地域の高等教育機関との交渉を行った。その結果、フィンランドのユバスキュラ大学とリトアニアのウタスマダヌス大学との学術交流協定書の締結を実現した。これら2大学には、それぞれ1名の佐賀大学生を平成25年度中に派遣することができ、実質的な学生交流の形で実を結んだ。

これまで欧米圏に偏っていた学生派遣をよりバランスのとれたものにするために、アジア諸国へ交換留学をする学生への教育的支援プログラム「アジアで活躍するリーダー養成プログラム」を開始した。本プログラムでは、現地での学習や経験をより豊かなものにし、最終的には派遣先国の理解、ネットワーク形成、人間的成長を促すことを目指している。本プログラムは日本学生支援機構の支援事業に採択され、9名の学生が奨学金（月額6万円又は7万円を一年間）を受給することができた。

また、交換留学を行なう本学学生への経済的支援は、平成24年度に開始した個人で行う留学に対する支援に修正を加え、交換留学生を対象とした給付額30万円（1年間の留学）の奨学金を支給することとした。平成25年度は7名の学生が本支援を受けて海外に留学し、支援総額は195万円となった。その結果平成25年度に派遣されたすべての学生はJASSO、あるいは佐賀大学独自の奨学金のいずれかを受給し、経済的支援を受けることができた。

平成24年度は21名が派遣されたが、本年度はアジア以外の協定校へ派遣された学生14名、アジア諸国への派遣学生16名と増加した。

### 項目4：SUSAP (Saga University Study Abroad Program) の実施

国際交流推進センターでは、平成25年度より「学生の海外志向を引き出す海外研修・国際交流プログラム」の拡充を目指し、多様な海外学習の機会を多くの学生に提供するための取り組みを進めてきた。従来は語学の学習を主とするもの（パシフィック、モナシュ、オークランド）が中心であったが、今年度より大邱大学（韓国）と浙江理工大学（中国）との連携により、異文化交流や現地社会についての理解を主眼としたもの（香港、韓国、中国）を加えることが出来た。これにより、学生の多様な関心やニーズに応えながら経済的な負担を抑えた教育プログラムを提供することができた。平成25年度は5カ国、6機関の協力を得て、6つのプログラムを実施し、合計64名の学生（応募者数は75名）を書類および面接審査により選抜し派遣した。昨年度の派遣者数（36名）に比べてほぼ倍増した。

### 項目5：相互交流プログラム：香港中文大学・佐賀大学サマーキャンプ

佐賀大学と香港中文大学学生交流プログラムは、両大学の双方向の交流を活発化す



るために、平成 24 年度より実施している。平成 25 年 2 月には佐賀大学生 8 名が国際都市香港を訪問し、香港中文大学学生と活発な議論を行うと同時に、商業施設や文化施設を訪れ、香港の歴史や経済を積極的に学んでいる。今回は、日本語教育などを専門とする香港中文大学学生 10 名が佐賀大学を訪問し、様々な講義を受けると同時に佐賀県内で実践学習を体験した。サマーキャンプでは、「日本の食と文化」「佐賀の伝統食」「佐賀の伝統技術と文化の継承」「森林保全」「農業体験と農村」などの学習を 10 日間で集中的に行なった。最終日には学習した内容を香港中文大学学生のグループが発表した。本プログラムの特色は、両大学の学生同士が、それぞれの学習の場で、親密に交流しながら互いに学びの姿勢を吸収することで、本サマーキャンプを通じて活発な学生交流が行われ、充実した学習プログラムとなった。

## (2)分析評価

項目 1、及び項目 3～項目 5 は戦略 2 「海外を志向する日本人学生向けの国際教育プログラム」、項目 2 は戦略 4 「留学生・外国人教員等に係わる国際化支援制度の創設」に対応して実施された。また項目 5 は戦略 6 「受入れ及び派遣重点大学の指定とこれまでに輩出した海外研究者・教育者との連携による留学生・研究者の受入れ」の受け入れ及び派遣重点大学の指定に今後発展していく可能性を秘めたプログラムとして位置付けられる。

昨年に引き続き派遣学生の支援制度である項目 2 が実施されたことに加え、新たに派遣プログラム（項目 3～項目 5）が策定されたことにより、海外派遣の支援の仕組みが確立できたと評価される。また項目 5 は戦略 6 の有力な手段となる可能性があり、今後の継続的発展が期待されるプログラムである。

## 3. 大学間交流基盤の構築

### (1)活動状況と成果

#### 項目 1：国際交流推進センター先導の大学間交換交流協定

本学は部局での研究交流を主体とした協定締結が中心であったが、今後は、学生交流を主体とした協定の締結を実現するため、戦略的に国際交流を推進する必要性を認めた大学間交流協定を国際交流推進センターが先導することを決定した。本年度は、ヴィタウタス・マグヌス大学（リトアニア）、フィンランド・ユヴァスキュラ大学、オルレアン大学（フランス）との大学間交流協定を締結した。

#### 項目 2：協定校との交流状況の実態調査

現在の協定校との交流状況の把握及びその対応、さらには重点大学の選定等への積極的な活用に役立てるため実態調査を行った。調査の結果、休眠状況にある協定校は少なく、大多数の協定校との交流が継続的に実施されていることが判明した。

### (2)分析評価

項目1と項目2は戦略2「海外を志向する日本人学生向けの国際教育プログラム」に対応して実施された。また項目2は戦略6「受入れ及び派遣重点大学の指定とこれまでに輩出した海外研究者・教育者との連携による留学生・研究者の受入れ」の受入れ及び派遣重点大学の選定において活用できる基礎情報となる。

項目1は、国際交流推進センターが戦略的に交流大学を開拓することが可能となり、有効な手段である。このような戦略的な取り組みは専任のコーディネーター教員の存在によって実現するものであり、国際コーディネーターの能力と役割（戦略7「国際広報と国際支援体制の強化」に対応した内容）が発揮できる可能性が拡大すると期待できる。

## 4. キャンパスの国際化

### (1) 活動状況と成果

#### 項目1：日本人学生と留学生の交流の場・機会の創出

昨年度に開始したランゲージ・ラウンジ活動を本年も継続して実施した。後述のグローバルリーダーズのメンバーが中心となり、韓国語、英語、中国語、日本語、フランス語のラウンジが学期を通して開催された。平成25年度は各ラウンジでは、1～2名のリーダーズがファシリテーターとなり、ゲームなどのアクティビティや会話のテーマを準備している。語学の授業とは一味違った、学生ならではの思考を凝らした取り組みを行っている。

#### 項目2：グローバルリーダーズ

佐賀大学キャンパスにおける国際交流活動を促進するため、国際交流推進センターの教職員とともにプログラムやイベントを企画・運営する学生リーダーを募集し、平成25年5月より活動を開始した。グローバルリーダーズは、多様な文化や価値観を尊重しながら学習・研究・知的交流ができるキャンパスとはどのような空間かを学生自らが考え、リーダー個々が備える資質や能力を最大限に発揮することが求められる。平成25年度は交換留学からの帰国学生や留学生を中心に10名のメンバーが活動に携わった。リーダーズ活動の主軸は、毎日お昼休みに開催する「ランゲージ・ラウンジ」である。

平成25年度のその他の活動としては、4月と10月の新入留学生研修旅行サポート、7月のサマープログラムにおける文化交流イベント「カルチュラル・ナイト」、留学生と日本人学生と一緒にパフォーマンスを披露する「パフォーマンスナイト」を行なった。また年度末の3月には、唐津でリーダーズ研修を行い、取り組みを発展させるためのスキル向上と新年度に向けての課題と計画を検討した。

### (2) 分析評価

項目1と項目2は国際化モデル1「ローカル国際大学」を実現する内容をもって実施された。

昨年度開始された項目1は2年目を迎えて定着した感がある。また本年新たに設けられた項目2は、学生の主体的な交流活動を育成する制度であり、「ローカル国際大学」の実質的な取り組みとして高く評価できる。

## 5. 研究者海外交流の支援に関する状況と自己評価

### (1)活動状況と成果

#### 項目1：研究者海外派遣の支援

昨年度に引き続き、海外の大学・研究機関との研究交流ネットワークを目的とする研究者・教員の海外派遣を公募した。その結果、11名の教員に対して支援を行い、総計508万円を支給した。

#### 項目2：国際研究集会の支援

昨年度に引き続き、佐賀大学教員が企画・主催し、佐賀大学で実施する研究集会（国際シンポジウム、国際セミナーなど）を公募した。その結果5件の国際研究集会に対して支援を行い、総計394万円を支給した。

### (2)分析評価

項目1と2は戦略4「留学生・外国人教員に係わる国際化支援制度の創設」に対応して実施された。

ともに昨年度開始した制度であるが、2年目を迎えて今後継続発展させるための課題も浮上した。項目1は若手教員の取り組みに対する支援であることが評価できるが、継続的組織的な交流への発展という視点が希薄であるケースが多く、今後の改善が求められる。一方項目2は国際的な研究者交流の支援として重要であり、国際化モデル1「ローカル国際大学」及び2「サマー国際キャンパス」の推進にも有効な方策であり、今後さらに支援を強化充実することが望まれる。

## 6. 地域連携による国際交流に関する状況と自己評価

### (1)活動状況と成果

#### 項目1：「産学官国際交流セミナー」の開催

佐賀大学と地域の産業界及び行政との共同の取り組みとして、セミナーを共同開催した。前年度と同様に講演、個別面談及び母国紹介ともに盛況であった。参加企業16社、参加人数140数名を得て、成功裡に終了した。

#### 項目2：留学生対象就職支援講演会

国際交流推進センターが主催し、九州グローバル産業人材協議会との共催により、留学生を対象とした就職支援講演会を開催した。受講対象はすべての留学生とし、特に全員日本企業に就職を希望する学生に呼びかけを行なった。企業関連の参加も多く見られ、留学生は個別相談ブースにおいて熱心に質問をしていた。本事業は全国中小企業団体中央会補助事業（地域中小企業の海外人材確保・定着支援事業）の採択を受け

て実施した。

## (2)分析評価

項目1と項目2はともに戦略5「企業や地域と連携する国際化の実践プロジェクト」に対応して実施された。

地域と連携する取り組みが少なく今後強化すべき分野であるため、上記の取り組みを核にさらに発展させる方向を検討する必要がある。

## 7. 重点的海外ネットワークの構築に関する状況と自己評価

### (1)活動状況と成果

#### 項目1：ハノイサテライトの継続

本年度もサテライトの活動を継続した。しかしながら、文化教育学部がハノイ国家大学外国語学部と実施しているツイニング・プログラムの現状がツイニング・プログラム本来の目的を実現できていないことやその将来性が不透明であることが明らかになったため、サテライトの契約継続が今後の課題となった。

#### 項目2：佐賀大学友好特使の委嘱

佐賀大学の帰国留学生等を佐賀大学友好特使として委嘱し、友好特使を通じて留学情報、研究情報等を発信・収集し、留学生交流及び国際学術交流を図ることにより、本学の国際化を推進することを目的に、平成25年2月に「佐賀大学友好特使に関する要項」を制定した。本年度は佐賀大学出身の帰国留学生等10名、海外で活躍する佐賀県出身者2名に友好特使を委嘱した。

### (2)分析評価

項目1と項目2はともに戦略6「受入れ及び派遣重点大学の指定とこれまでに輩出した海外研究者・教育者との連携による留学生・研究者の受入れ」に対応して実施された。項目1は派遣重点大学の指定に関係し、一方項目2は海外研究者・教育者との連携に関係する。

項目1については、実績の評価に加え、今後の必要性和発展性を合わせて検討し、継続か廃止かの結論を出すことが望まれる。

## 8. 広報に関する状況と自己評価

### (1)活動状況と成果

#### 項目1：ホームページの改善

佐賀大学のホームページが改定されることになり、国際交流に関する記事をホームページに掲載することにより、センターの広報機能の強化を図ることにした。

#### 項目2：国際機関等との連携によるセミナーの開催

佐賀大学の国際交流を強化するためには、大学の枠組みや発想を超えた取り組みも今後必要であることから、文部科学省以外の視点から国際交流を展望する手掛かりを

得るため、3月31日に国際交流を本務としている代表的な国際機関・ハビタットと国内機関・JICAから二人の講師を招き、懇談会を行った。

### 項目3：ニューズレターの発行

センターの学内広報活動として、主要な国際交流活動を網羅するニューズレターの発行を開始した。

### (2)分析評価

項目1～項目3は、戦略7「国際広報と国際支援体制の強化」に対応して実施された。項目2と項目3は本年度に開始したものであり、今後の継続・定着が望まれる。

## 9. 国際コーディネーターの国際交流に関する教育・研究活動

### (1)国際交流に関わる教育貢献（講義等）

2名の専任教員（藤田教授、山田准教授）は下記の5件の教育活動を行った。

(a)国際交流推進センターが実施する短期研修プログラム（SUSAP）の事前・事後研修の実施（一部、単位化「国際交流実習」）：山田准教授

- ① モナシュ大学プログラム（5コマ分）国際交流実習2単位
- ② オークランド大学プログラム（5コマ分）国際交流実習2単位
- ③ 大邱大学校プログラム（5コマ分）単位なし
- ④ 浙江理工大学プログラム（5コマ分）単位なし

新規に立ち上げた浙江理工大学プログラムでは、プログラム最終日に上海において「上海セミナー」を開催し、本学の友好特使である佐賀県人会幹事の江頭氏および本大学卒業生2名に海外で活躍するための資質や心構えなどについて講義をしていただいた。

(b)佐賀大学サマープログラム・香港中文大学サマーキャンプの立ち上げ：山田准教授  
3週間のサマープログラムのカリキュラム設計、日本人学生との交流、ホームステイ、視察や体験など、本学の特色ある研究や教育を活用したプログラムを作成した。参加学生の受入条件、対象となる協定大学などについても、学生交流部門での審議を経てプログラム化することが可能となった。サステイナビリティをテーマに、文化教育学部、理工学部、農学部の協力をいただき実施した。香港中文大学との学生交流プログラムも先方と協議を重ねながら、ニーズにそった内容や活動を組み込みプログラム化した。

(c)キャンパスの国際化促進のための学生リーダーの組織化と養成：山田准教授  
学生が教室外で異文化に対する感受性や多様な文化的文脈の中で考え、対話し、行動する力を養うためのIaH（Internationalization at Home）を行なうために、異文化に関心をもち、意欲と能力のある学生集団を組織し、リーダー教育を行なった。その上で、国際交流推進センターと連携して、学生の主体性をいかした様々な取り組みを実施することで、異文化があふれるキャンパスをつくり、多くの学生に留学

生との積極的な交流や海外留学への関心などへと誘引した。とくにランゲージラウンジ活動の取り組みは、参加学生数も多く大きな成果をあげている。

(d) 佐賀大学「公開講座ーアジアと生きるー」平成25年6月20日：藤田教授

第6回目 アジアにおける日本の位置 ー人・資源・地理の視点からー  
本講座は、「今アジアが面白い、アジアから学ぶ、アジアを知る、アジアを読む、それからアジアと共に生きる」といった気概を持つ人々の交流と学習の場である。本講座の究極の目的は、「国際化（アジアとの出会い）による地域社会全体の活性化」にある。国際化による大学・学部・学生の、さらには地域住民の活性化を目指している。

(e) 日韓共同理工系学部留学生へ対する予備教育（ソウル：慶熙大）

平成25年8月12-14日：藤田教授

来日前の日韓共同理工系学部留学生約100名に対して日本の大学で行なわれるような形式で物理の講義をおこなった。

## (2) 国際交流に関連する研究実績（外部資金の獲得実績）

2名の専任教員（藤田教授、山田准教授）は下記の研究活動を行った。両名とも科研費の研究を担当した。

(a) 科研費：基盤研究(A) 「災害対応の地域研究の創出ー「防災スマトラ・モデル」の構築とその実践的活用」（代表者・山本博之 京都大学）：山田准教授

山田直子(2013)「ミナンカバウ母系制村落社会における婚姻と家族-ナガリ・ティゴ・コト村落住民のライフヒストリーからー」『比較家族史研究』、27号、27-52頁。【査読あり】

山田直子(2013)「3.11東日本大震災における留学生の経験・判断・行動-多文化共生社会に関する一考察」多文化関係学会九州地区研究会、於：九州地区伊都キャンパス、2013年3月1日。【査読なし】

(b) 科研費：基盤研究(B)「日韓プログラム予備教育における総合的な『日韓共同（協働）教育』を目指す実践的研究」平成24-26年度：藤田教授

・平成25年8月3日 日韓科学研究総会2013（主管校：佐賀大学）

・韓国及び日本における日韓共同理工系学部留学生への予備教育の問題や学部での進路に対する調査分析をおこなった。

## (3) 分析評価

教育貢献は戦略1「英語特別コースなどを拡充した新国際教育プログラム、新特別コースの再構築」及び戦略2「海外を志向する日本人学生向けの国際教育プログラム」、研究業績は戦略7「国際広報と国際支援体制の強化」に関係している。

教育と研究の業績と成果は、二人のコーディネーターの能力の高さを証明している。

藤田教授は、本人の希望もあり平成25年9月に大阪大学へ転出され、短い在職期間

ではあったが、コーディネーター及び企画室長として尽力された。

山田准教授は、藤田教授の転出後、孤軍奮闘状況になりながらも、コーディネーター及び学生教育交流部門長として、新教育プログラムの創設、戦略的交流大学との交渉及び協定の締結、キャンパス国際化の仕組みづくりなど数々の目覚ましい実績を上げられ、佐賀大学の国際交流活動の向上に貢献された。

### Ⅲ 自己点検・評価のまとめ

国際交流推進センターの目的である佐賀大学国際戦略の7つの戦略の実施及び到達目標である4つの国際化達成モデルについて自己点検を行った結果を、下記の表に示す。前年度に比して本年度新たに着手、あるいは顕著に充実・向上したと評価できる項目については赤字で示した

戦略1は、重要な学部教育プログラム（SPACE）の変革後の実施によって、将来にわたるプログラムの有効性を確認できたこと、及び念願の特別コースの再編プログラムが文科省の支援に採択されたことによって、戦略1のコアプログラムが確立されたことが高く評価できる。

戦略2は、「協定校の連携プログラム」が策定されてことにより、全ての項目が実現した。2年目において「海外を志向する日本人学生向けの国際教育プログラム」をほぼ実現できたことは特筆できる成果である。

戦略3は、本年度も実質的な着手が見られず、来年度以降に持ち越された。

戦略4は、教員の受け入れ支援が未着手であることを除けば、支援体制が整った。

戦略5は、本年度も実質的な実施が見られず、来年度以降に持ち越された。

戦略6は、3項目とも一部ではあるが実施がなされた。本格的実施の手掛かりが得られたことは評価できる。

戦略7は、部局と連携し研究成果の国際広報を実現すること、地域との連携を強化すること課題である。

以上のように、戦略1、戦略2、戦略4の三つの戦略において顕著な成果が見られた。一方戦略3と戦略5については昨年度同様まったく進展が見られない。いずれも難しい内容ではあるが、英知を結集し着手することが、佐賀大学の国際を飛躍させるうえで不可欠である。

次に、国際化の到達モデルでは、国際化モデル1と国際化モデル2が昨年度既に成果が現れたが、本年度はさらに充実発展したことが特筆される。

国際化モデル1では、学生の主体的な日常的交流活動が根を下ろしてきたことから、学生への広範な影響、特に海外志向や留学意欲などへの影響が期待できる。

また国際化モデル2では、海外の学生や研究者の短期滞在が日常的な風景になりつつある。佐賀大学のキャンパスの施設や環境を国際交流の場として改善することも今後の課題になるだろう。

国際戦略	戦略の細項目	評価
<u>戦略1：英語特別コースなどを拡充した新国際教育プログラム、新特別コースの再構築</u>	① 日本人学生・外国人留学生双方向プログラム	△
	② 特別コースの再構築	○
	③ SPACEプログラムの再構築	◎
	④ ICT活用による教育プログラム	
<u>戦略2：海外を志向する日本人学生向けの国際教育プログラム</u>	① 学部学生向けに留学の動機づけとなる新たな国際プログラムを創設	○
	② 語学の実践的・重点的教育の実施	○
	③ 協定校間の連携プログラムの構築	◎
<u>戦略3：国際化の先導となる学術分野及びプログラムの選択と集中</u>	① 先導分野の検討	△
	② 先導プログラムの検討	△
<u>戦略4：留学生・外国人教員等に係わる国際化支援制度の創設</u>	① 留学生支援及び受入れ促進	○
	② 研究者の受入れ及び派遣支援	△
	③ 国際シンポジウムの支援	◎
<u>戦略5：企業や地域と連携する国際化の実践プロジェクト</u>	① 出口就職対策	△
	② インターンシップ	
	③ 学生経済支援目的の人材活用プログラム	
<u>戦略6：受入れ及び派遣重点大学の指定とこれまでに輩出した海外研究者・教育者との連携による留学生・研究者の受入れ</u>	① 佐賀大学育ちの海外研究者・教育者（O B）のネットワーク組織の支援による留学生人材確保と修了後の就業支援	△
	② 戦略的な重点交流大学の選定及びその基準	△
	③ 連携によるジョイントプログラムの開発	△
<u>戦略7：国際広報と国際支援体制の強化</u>	① 研究成果の国際広報	
	② 佐賀県や県内市町等との連携した国際窓口の設置及び国際広報の在り方	△
	③ 国際コーディネーターの機能と役割	◎
	④ 事務支援体制	○

- 凡例 ◎ 顕著な成果の実績  
○ 戦略内容の実施  
△ 戦略内容の一部の実施  
▲ 戦略の準備に着手



国際化の到達モデル	イメージ	評価
(1) ローカル国際大学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生交流の日常的なキャンパス</li> <li>・ 外国人教員及び研究者群が目立つキャンパス</li> </ul>	○
(2) サマー国際キャンパス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ サマーセミナー、サマー国際シンポジウム開催による夏季キャンパスの先導的国際化</li> <li>・ 施設と人材の有効活用、時期限定の集中的な国際交流の実施による実験的国際化</li> </ul>	○
(3) 国際ラボネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「国際パートナーシップ」、「国際教育・研究交流事業」等の全学国際交流の中心プログラムとしての実施</li> <li>・ 海外の有数の国際大学との交流による研究者の短期招致</li> <li>・ 研究室、研究所のラボ・ブランチの相互開設</li> </ul>	
(4) 国際交流のスパイラル化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教育・研究・地域連携・留学生施策に必要な制度化を図るとともに、それらの各分野が密接な連携を持ち、相互作用を發揮しながら本学の国際交流が進展</li> </ul>	

- 凡例 ◎ 顕著な実現  
○ ほぼ実現  
△ 一部実現